

昭和四十六年法律第四十号

民事訴訟費用等に関する法律

目次

第一章 総則(第一条・第二条)

第二章 裁判所に納める費用

第一節 手数料(第三条―第十条)

第二節 手数料以外の費用(第十一条―第十三条の二)

第三節 費用の取立て(第十四条―第十七条)

第三章 証人等に対する給付(第十八条―第二十一条)

第四章 雑則(第二十九条・第三十条)

附則

第一章 総則

(趣旨)

第一条 民事訴訟手続、民事執行手続、民事保全手続、行政事件訴訟手続、非訟事件手続、家事審判手続その他の裁判所における民事事件、行政事件及び家事事件に関する手続(以下「民事訴訟等」という。)の費用については、他の法令に定めるもののほか、この法律の定めるところによる。

(当事者その他の者が負担すべき民事訴訟等の費用の範囲及び額)

第二条 民事訴訟法(平成八年法律第九号)その他の民事訴訟等に関する法令の規定により当事者等(当事者又は事件の關係人をいう。第四号及び第五号を除き、以下同じ。)又はその他の者が負担すべき民事訴訟等の費用の範囲は、次の各号に掲げるものとし、その額は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 次条及び第三条の二の規定による手数料その手数料の額(第九条第二項の規定により還付される額があるときは、その額を控除した額)

二 第十一条第一項の費用 その費用の額

三 執行官法(昭和四十一年法律第一百一十号)の規定による手数料及び費用 その手数料及び費用の額

四 当事者等(当事者若しくは事件の關係人、その法定代理人若しくは代表者又はこれらに準ずる者をいう。以下この号及び次号において同じ。)が口頭弁論又は審問の期日その他裁判所が定めた期日に出頭するための旅費、日当及び宿泊料(親権者以外の法定代理人、法人の代表者又はこれらに準ずる者が二人以上出頭したときは、そのうちの最も低額となる一人についての旅費、日当及び宿泊料)及び宿泊料の額

イ 旅費

(1) 旅行が本邦(国家公務員等の旅費に関する法律(昭和二十五年法律第十四号)第二条第二号に規定する本邦をいう。以下同じ。)と外国(本邦以外の領域(公海を含む。))をいう。以下同じ。)との間のものを含まない場合においては、当事者等の普通裁判籍の所在地を管轄する簡易裁判所の主たる庁舎の所在する場所と出頭した場所を管轄する簡易裁判所の主たる庁舎の所在する場所との間の距離を基準として、その距離を旅行するとき通常要する交通費の額として最高裁判所が定める額(これらの場所が同一となるときは、最高裁判所が定める額)。ただし、旅行が通常の経路及び方法によるものであること並びに現に支払った交通費の額が当該最高裁判所が定める額を超えることを明らかにする領収書、乗車券、航空機の搭乗券の控え等の文書が提出されたときは、現に支払った交通費の額

(2) 旅行が本邦と外国との間のものを含む場合において、当該旅行が通常の経路及び方法によるものであるときは、現に支払った交通費の額(当該旅行が通常の経路又は方法によるものでないときは、証人に支給する旅費の例により算定した額)

ロ 日当 出頭及びそのための旅行(通常の経路及び方法によるものに限る。)に現に要した日数に応じて、最高裁判所が定める額。ただし、旅行が通常の経路若しくは方法によるものでない場合又は本邦と外国との間のものを含む場合には、証人に支給する日当の例により算定した額

ハ 宿泊料 出頭及びそのための旅行(通常の経路及び方法によるものに限る。)のために現に宿泊した夜数に応じて、宿泊地を区分して最高裁判所が定める額。ただし、旅行が通常の経路若しくは方法によるものでない場合又は本邦と外国との間のものを

含む場合には、証人に支給する宿泊料の例により算定した額

五 代理人(法定代理人及び特別代理人を除く。以下この号において同じ。)が前号に規定する期日に出頭した場合(当事者等が出頭命令又は呼出しを受けない期日に出頭した場合を除く。)における旅費、日当及び宿泊料(代理人が二人以上出頭したときは、そのうちの最も低額となる一人についての旅費、日当及び宿泊料) 前号の例により算定した額。ただし、当事者等が出頭した場合における旅費、日当及び宿泊料の額として裁判所が相当と認める額を超えることができない。

六 訴状その他の申立書、準備書面、書証の写し、訳文等の書類(当該民事訴訟等の資料とされたものに限る。)の作成及び提出の費用 事件一件につき、事件の種類、当事者等の数並びに書類の種類及び通数(事件の記録が電磁的記録で作成されている場合にあつては、当該電磁的記録に記録された情報の内容を書面に出力したときのその通数)を基準として、通常要する書類の作成及び提出の費用の額として最高裁判所が定める額

七 官庁その他の公の団体の公証人から前号の書類の交付を受けるために要する費用 当該官庁等に支払うべき手数料の額に交付一回につき第一種郵便物の最低料金の二倍の額の範囲内において最高裁判所が定める額を加えた額

八 第六号の訳文の翻訳料 用紙一枚につき最高裁判所が定める額

九 文書又は物(裁判所が取り調べたものに限る。)を裁判所に送付した費用 通常の方法により送付した場合における実費の額

十 民事訴訟等に関する法令の規定により裁判所が選任を命じた場合において当事者等が選任した弁護士又は裁判所が選任した弁護士に支払った報酬及び費用 裁判所が相当と認める額

十一 裁判所が嘱託する登記又は登録につき納める登録免許税 その登録免許税の額

十二 強制執行の申立て若しくは配当要求のための債務名義の正本若しくは記録事項証明書(交付、公証人法(明治四十一年法律第五十三号)第四十四条第一項第二号の書面の交付若しくは同項第三号の電磁的記録の提供、執行文の付与又は民事執行法(昭和五十四年法律第四号)第二十九条の規定により送達すべき書類の交付若しくは電磁的記録の提供を受けるための費用) 裁判所その他の官庁又は公証人に支払うべき手数料の額に交付又は付与一回につき第一種郵便物の最低料金の二倍の額に書留料を加えた額の範囲内において最高裁判所が定める額

十三 公証人法第四十八条の規定により公証人がする書類又は電磁的記録の送達のために要する費用 公証人に支払うべき手数料及び送達に要する料金の額

十四 第十二号の交付若しくは付与を受け、又は前号の送達を申し立てるために裁判所以外の官庁又は公証人に提出すべき書類で官庁等の作成に係るものの交付を受けるために要する費用 第七号の例により算定した費用の額

十五 裁判所が支払うものを除き、強制執行、仮差押えの執行又は担保権の実行(その例による競売を含む。)に関する法令の定めるところにより裁判所が選任した管理人又は管財人が受ける報酬及び費用 当該法令の規定により裁判所が定める額

十六 差押債権者が民事執行法第五十六条第一項(これを準用し、又はその例による場合を含む。)の許可を得て支払った地代又は借賃 その地代又は借賃の額

十七 第二十八条の二第一項の費用 同項の規定により算定した額

十八 民法(明治二十九年法律第八十九号)第三百八十五条(同法その他の法令において準用する場合を含む。)の規定による通知を書面で行った場合の通知の費用 通知一回につき第一種郵便物の最低料金を書留料を加えた額の範囲内において最高裁判所が定める額

第二節 手数料

(申立ての手数料)

第三条 別表第一の上欄に掲げる申立てをするに、申立ての区分に応じ、それぞれ同表の下欄に掲げる額の手数料を納めなければならない。

前項の規定にかかわらず、民事訴訟法第三百三十二条の十第一項(行政事件訴訟法(昭和三十三年法律第三十九号)第七條の規定)によりその例によることとされる場合を含む。)の規定により電子情報処理組織を使用する方法(以下単に「電子情報処理組織を使用する方法」という。)により行うことができるものとされている

律第四号)第二十九条の規定により送達すべき書類の交付若しくは電磁的記録の提供を受けるために要する費用 裁判所その他の官庁又は公証人に支払うべき手数料の額に交付又は付与一回につき第一種郵便物の最低料金の二倍の額に書留料を加えた額の範囲内において最高裁判所が定める額を加えた額

る申立てであつて、別表第二の上欄に掲げるもの（以下「特定申立て」という。）をその場合においては、申立ての区分に応じ、それぞれ同表の下欄に掲げる額の手数料を納めなければならない。

3 次の各号に掲げる場合には、当該各号の申立てをした者（第三号に掲げる場合において消費者の財産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律（平成二十五年法律第九十六号）第四十九条第二項の規定により届出消費者が異議の申立てをしたときは、その届出消費者）は、訴えを提起する場合の相手料の額から当該申立てについて納めた相手料の額（当該申立てが第一号の和解の申立てに係るものである場合にあっては二千元を、当該申立てが同号の支払督促の申立てに係るものである場合にあっては別表第二の一の項イに掲げる額を、それぞれ超えない部分に限る。）を控除した額の手数料を納めなければならない。

一 民事訴訟法第二百七十五条第二項又は第三百九十五条若しくは第三百九十八条第一項の規定により和解又は支払督促の申立てをしたときに訴えの提起があつたものとみなされたとき。  
二 労働審判法（平成十六年法律第四十五号）第二十二條第一項（同法第二十三條第二項及び第二十四條第一項において準用する場合を含む。）の規定により労働審判手続の申立ての時に訴えの提起があつたものとみなされたとき。

三 消費者の財産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律第五十六條第一項の規定により債権届出の時に訴えの提起があつたものとみなされたとき。

4 一の判決に対して上告の提起及び上告受理の申立てをする場合において、その主張する利益が共通であるときは、その限度において、その一方について納めた相手料は、他の一方についても納めたものとみなす。一の決定又は命令に対して民事訴訟法第三百三十六條第一項（これを準用し、又はその例による場合を含む。）の規定による抗告の提起及び同法第三百三十七條第二項（これを準用し、又はその例による場合を含む。）の規定による抗告の許可の申立てをする場合も、同様とする。

5 破産法（平成十六年法律第七十五号）第二百四十八條第四項本文の規定により破産手続開始の申立てと同時に免責許可の申立てをしたもの

とみなされたときは、当該破産手続開始の申立てをした者は、免責許可の申立ての相手料を納めなければならない。

（扶養義務等に係る債権に基づく財産開示手続実施等の申立ての相手料の特例）

第三条の二 民事執行法第六十七條の第七項本文（同法第九十三條第二項において準用する場合を含む。）の規定により同法第九十七條第一項若しくは第二項の申立て又は同法第二百六條第一項若しくは第二項の申立て（以下この条において「財産開示手続実施等の申立て」という。）と同時に債権の差押命令の申立てをしたものとみなされる場合には、当該財産開示手続実施等の申立てをする者は、財産開示手続実施等の申立てをする時に当該財産開示手続実施等の申立ての相手料を納めなければならない。この場合において、当該差押命令により差し押さえるべき債権を特定することができるときは、更に債権の差押命令の申立ての相手料を納めなければならない。

（訴訟の目的の価額等）

第四条 別表第一及び別表第二において相手料の額の算出の基礎とされている訴訟の目的の価額は、民事訴訟法第八條第一項及び第九條の規定により算定する。

2 財産権上の請求でない請求に係る訴えについては、訴訟の目的の価額は、百六十万円とみなす。財産権上の請求に係る訴えで訴訟の目的の価額を算定することが極めて困難なものについても、同様とする。

3 一の訴えにより財産権上の請求でない請求とその原因である事実から生ずる財産権上の請求とをあわせてするときは、多額である訴訟の目的の価額による。

4 第一項の規定は、別表第二の一の項イの相手料の額の算出の基礎とされている価額について準用する。

5 民事訴訟法第九條第一項の規定は、別表第一の一三の項及び一三の二の項の相手料の額の算出の基礎とされている額について準用する。  
6 第一項及び第三項の規定は、別表第一の一四の項及び一四の二の項の相手料の額の算出の基礎とされている価額について準用する。  
7 前項の価額は、これを算定することができないか又は極めて困難であるときは、百六十万円とみなす。

（相手料を納めたものとみなす場合）

第五条 民事訴訟法第三百五十五條第二項（第三百六十七條第二項において準用する場合を含む）

（民事調停法（昭和二十六年法律第二百二十二号）第十九條（特定債務等の調整の促進のための特定調停に関する法律（平成十一年法律第五十八号）第十八條第二項（第十九條において準用する場合を含む。））において準用する場合を含む。）又は家事事件手続法（平成二十三年法律第五十二号）第二百七十二條第三項（同法第二百七十七條第四項において準用する場合を含む。））第二百八十八條第五項若しくは第二百八十六條第六項の訴えの提起の相手料については、前の訴えの提起又は調停の申立てについて納めた相手料の額に相当する額は、納めたものとみなす。

2 前項の規定は、民事調停法第十四條（第十五條において準用する場合を含む。）の規定により調停事件が終了し、又は同法第十八條第四項の規定により調停に代わる決定が効力を失った場合において、調停の申立人がその旨の通知を受けた日から二週間以内に調停の目的となつた請求についてする借地借家法（平成三年法律第九十号）第十七條第一項、第二項若しくは第五項（第十八條第三項において準用する場合を含む。）、第十八條第一項、第十九條第一項（同条第七項において準用する場合を含む。）若しくは第二十二條第一項（同条第五項において準用する場合を含む。）又は大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法（平成二十五年法律第六十一号）第五條第一項（同条第四項において準用する場合を含む。）の規定による申立ての相手料について準用する。

（相手料未納の申立て）

第六条 相手料を納めなければならない申立てでその納付がないものは、不適法な申立てとする。

（裁判所書記官が保管する記録の閲覧、謄写等の相手料）

第七条 別表第三の上欄に掲げる事項の相手料は、同表の下欄に掲げる額とする。

（納付の方法）

第八条 次に掲げるもの相手料は、最高裁判所規則で定めるところにより、現金をもって納めなければならない。ただし、申立てを書面をもつてすることができるときは、訴状その他の申立書又は申立ての趣意を記載した調書に収入印紙を貼つて納めることができる。

一 特定申立て

二 別表第三の一の項から三の項までの上欄に掲げる事項であつて特定申立てに係る事件に関するもの

2 前項の相手料以外の相手料は、訴状その他の申立書又は申立ての趣意を記載した調書に収入印紙を貼つて納めなければならない。ただし、最高裁判所規則で定める場合には、最高裁判所規則で定めるところにより、現金をもつて納めることができる。

（過納相手料の還付等）

第九条 相手料が過大に納められた場合においては、裁判所書記官は、申立てにより、過大に納められた相手料の額に相当する金額の金銭を還付しなければならない。

2 次の各号に掲げる申立てについてそれぞれ当該各号に定める事由が生じた場合においては、裁判所書記官は、申立てにより、納められた相手料の額（第五条の規定により納めたものとみなされた額を除く。）から納めるべき相手料の額（同条の規定により納めたものとみなされた額を除くものとし、民事訴訟法第九條第一項に規定する合算が行われた場合における各個の請求の一に係る相手料にあつては、各請求の価額に応じて案分して得た額）の二分の一の額（その額が四千元に満たないときは、四千元）を控除した金額の金銭を還付しなければならない。

一 訴え若しくは控訴の提起又は民事訴訟法第四十七條第一項若しくは第五十二條第一項の規定若しくはこれらの規定の例による参加の申出、口頭弁論を経ない却下の裁判の確定又は最初にすべき口頭弁論の期日の終了前における取下げ  
二 民事調停法による調停の申立て、却下の裁判の確定又は最初にすべき調停の期日の終了前における取下げ  
三 労働審判法による労働審判手続の申立て、却下の裁判の確定又は最初にすべき労働審判手続の期日の終了前における取下げ  
四 借地借家法第四十一條（大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法第五條第二項（同条第四項において準用する場合を含む。））において準用する場合を含む。以下この号において同じ。）の事件の申立て、借地借家法第四十一條の事件における参加の申出（申立人として参加する場合に限る。）又はその申立て若しくは申出についての裁判に対する抗告（次号に掲げるものを除く。）

の提起 却下の裁判の確定又は最初にすべき  
審問の期日の終了前における取下げ

五 上告の提起若しくは上告受理の申立て又は  
前号の申立て若しくは申出についての裁判に  
対する非訟事件手続法(平成二十三年法律第  
五十一号)第七十四条第一項の規定による再  
抗告若しくは同法第七十五条第一項の規定に  
よる特別抗告の提起若しくは同法第七十七  
条第二項の規定による抗告の許可の申立て、  
裁判所(抗告の許可の申立てにあつては、そ  
の申立てを受けた裁判所。以下この号におい  
て同じ。)における却下の裁判の確定又は原  
裁判所が上告裁判所若しくは抗告裁判所に事  
件を送付する前における取下げ

六 支払督促の申立て、却下の処分確定又は  
電子支払督促の送達前における取下げ

3 前項の規定は、数個の請求の一部について同  
項各号に定める事由が生じた場合において、既  
に納めた手数料の全部又は一部がなお係属する  
請求についても納められたものであるときは、  
その限度においては、適用しない。同項第五号  
に掲げる申立てについては、同号に定める事由が生  
じた場合において、既に納めた手数料の全部又  
は一部がなお係属する他の同号に掲げる申立て  
についても納められたものであるときも、その  
限度において、同様とする。

4 第一項及び第二項の申立ては、一の手数料に  
係る申立ての申立人が二人以上ある場合におい  
ては、当該各申立人がすることができ、

5 第一項及び第二項の申立ては、その申立てを  
することができるときは、その申立ての日から五年以内  
にしなければならない。

6 第一項又は第二項の申立てについてされた裁  
判所書記官の処分に対しては、その告知を受け  
た日から一週間の不変期間内に、その裁判所書  
記官の所属する裁判所に異議を申し立てること  
ができる。

7 第一項及び第二項の申立て並びにその申立て  
についての裁判所書記官の処分並びに前項の規  
定による異議の申立て及びその異議の申立てに  
ついての裁判に関しては、その性質に反しない  
限り、非訟事件手続法第二編の規定(同法第二  
十七条及び第四十条の規定を除く。)を準用す  
る。

(再使用証明)

第十条 前条第一項及び第二項の申立てにおい  
て、第八条の規定により納めた収入印紙を当該

裁判所における他の手数料の納付について再使  
用したい旨の申出があつたときは、金銭による  
還付に代えて、還付の日から一年以内に限り再  
使用をすることができ、その旨の裁判所書記官の証  
明を付して還付すべき金額に相当する収入印紙  
を交付することができる。

2 前項の証明の付された収入印紙の交付を受け  
た者が、同項の証明に係る期間内に、当該収入  
印紙を提出してその額に相当する金額の金銭の  
還付を受けた旨の申立てをしたときは、同項  
の裁判所の裁判所書記官は、当該収入印紙の額  
に相当する金額の金銭を還付しなければならない  
。

3 前条第六項及び第七項の規定は、前項の規定  
による裁判所書記官の処分について準用する。  
第二節 手数料以外の費用

(納付義務)

第十一条 次に掲げる金額は、費用として、当事  
者等が納めるものとする。ただし、特定申立て  
に係る手続においては、第一号に掲げるものの  
うち、第十三条の料金に充てるための費用を納  
めることを要しない。

一 裁判所が証拠調べ、書類の送達その他の民  
事訴訟等における手続上の行為をするため必  
要な次章に定める給付その他の給付に相当す  
る金額

二 証拠調べ又は調停事件以外の民事事件若し  
くは行政事件における事実の調査その他の行  
為を裁判所外で行う場合に必要と裁判所書記官  
及び裁判所書記官の旅費及び宿泊料で、証人の例  
により算定したものに相当する金額

2 前項の費用を納めるべき当事者等は、他の法  
令に別段の定めがある場合を除き、申立てによ  
つてする行為に係る費用についてはその申立人  
とし、職権でする行為に係る費用については裁  
判所が定める者とする。

(予納義務)

第十二条 前条第一項の費用を要する行為につい  
ては、他の法律に別段の定めがある場合及び最  
高裁判所が定める場合を除き、裁判所は、当事  
者等とその費用の概算額を予納させなければな  
らない。

2 前項の規定による予納は、最高裁判所規則で  
定めるところにより、現金をもつてしなければならない  
。

3 裁判所は、第一項の規定により予納を命じた  
場合においてその予納がないときは、当該費用  
を要する行為を行わないことができる。

(郵便切手等による予納)

第十三条 裁判所は、郵便物の料金又は民間事業  
者による信書の送達に関する法律(平成十四年  
法律第九十九号)第二条第六項に規定する一般  
信書便事業者若しくは同条第九項に規定する特  
定信書便事業者の提供する同条第二項に規定す  
る信書便の役務に関する料金に充てるための費  
用に限り、金銭に代えて郵便切手又は最高裁判  
所が定めるこれに類する証票(以下「郵便切手  
等」という。)で予納させることができる。

(裁判所書記官が行う手続に係る費用に関する  
特例)

第十三条の二 次に掲げる手続で裁判所書記官が  
行うものに係る費用についての第十一条第二  
項、第十二条第一項及び第三項並びに前条の規  
定の適用については、第十一条第二項及び第十  
二条第三項中「裁判所」とあるのは「裁判所書  
記官」と、同条第一項及び前条中「裁判所は」  
とあるのは「裁判所書記官は」とする。

一 担保権利者に対する権利行使の催告  
二 口頭弁論に係る調査又は電子調査の更正  
三 督促手続  
四 訴訟費用、和解の費用又は非訟事件(他の  
法令の規定により非訟事件手続法の規定を準  
用することとされる事件を含む)、家事事件  
若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に  
関する条約の実施に関する法律(平成二十五  
年法律第四十八号)第二十九条に規定する子  
の返還に関する事件の手続の費用の負担の額  
を定める手続

五 民事執行法第四十二条第四項に規定する執  
行費用及び返還すべき金銭の額を定める手続  
六 少額訴訟債権執行(民事執行法第六十七  
条の二第二項に規定する少額訴訟債権執行を  
いう。以下同じ。)の手続

第三節 費用の取立て

(裁判により費用の負担を命ぜられた者からの  
取立て等)

第十四条 第十一条第一項の費用で予納がないも  
のは、裁判、裁判上の和解、調停若しくは労働  
審判によりこれを負担することとされた者又は  
民事訴訟等に関する法令の規定により費用を負  
担すべき者から取り立てることができる。

(予納がない場合の費用の取立て)

第十五条 前条の費用の取立てについては、第十  
一条第二項の規定により費用を納めるべき者に  
対する場合にあつては記録の存する裁判所の決

定により、その他の者に対する場合に於ては  
第一審の裁判所の決定により、民事執行法その  
他強制執行の手続に関する法令の規定に従い強  
制執行をすることができ、この決定は、執行  
力のある債務名義と同一の効力を有する。  
2 第九条第七項の規定は、前項の決定について  
準用する。

(訴訟上の救助により納付を猶予された費用の  
取立て)

第十六条 民事訴訟法第八十三条第三項又は第八  
十四条の規定による費用の支払を命ずる裁判  
は、強制執行に関しては、執行力のある債務名  
義と同一の効力を有する。

2 民事訴訟法第八十五条前段の規定による費用  
の取立てについては、前条の規定を準用する。  
(準用)

第十七条 民事訴訟法以外の法令において準用す  
る同法の規定により救助を受け納付を猶予され  
た費用の取立てについては、前条の規定を準用  
する。

第三章 証人等に対する給付

(証人の旅費の請求等)

第十八条 証人、鑑定人及び通訳人は、旅費、日  
当及び宿泊料を請求することができる。ただ  
し、正当な理由がなく、宣誓又は証言、鑑定若  
しくは通訳を拒んだ者は、この限りでない。

2 鑑定人及び通訳人は、鑑定料又は通訳料を請  
求し、及び鑑定又は通訳に必要な費用の支払又  
は償還を受けることができる。

3 証人、鑑定人及び通訳人は、あらかじめ旅  
費、日当、宿泊料又は前項の費用の支払を受け  
た場合において、正当な理由がなく、出頭せ  
ず、又は宣誓、証言、鑑定若しくは通訳を拒ん  
だときは、その支払を受けた金額を返納しなけ  
ればならない。

(説明者の旅費の請求等)

第十九条 民事訴訟法第二百八条第二項(これ  
を準用し、又はその例による場合を含む。)(こ  
れは公害紛争処理法(昭和四十五年法律第八  
号)第四十二条の三第二項の規定による説  
明者、民事訴訟法第八十七条第一項(これを  
準用し、又はその例による場合を含む。))の規  
定による審尋をした参考人及び事実の調査のた  
めに裁判所から期日に出席すべき旨の呼出しを  
受けた者は、旅費、日当及び宿泊料を請求する  
ことができる。

（調査の囑託をした場合の報酬の支給等）

第二十条 民事訴訟等に関する法令の規定により調査を囑託し、報告を求め、又は鑑定若しくは専門的な知識経験に基づく意見の陳述を囑託したときは、請求により、報酬及び必要な費用を支給する。民事訴訟等に関する法令の規定により保管人、管理人若しくは評価人を任命し、又は換価その他の行為を命じたときも、他の法令に別段の定めがある場合を除き、同様とする。

2 民事訴訟法第百三十二条の四第一項第一号の規定により文書（同法第百三十一条に規定する物件を含む。）又は電磁的記録の送付を囑託したときは、請求により、当該文書の写し又は電磁的記録の作成に必要な費用を支給する。

3 第十八条第三項の規定は、前二項の費用について準用する。

（旅費の種類及び額）

第二十一条 旅費は、鉄道賃、船賃、路程賃及び航空賃の四種とし、鉄道賃は鉄道のある区間の陸路旅行に、船賃は船舶の便のある区間の水路旅行に、路程賃は鉄道のない区間の陸路旅行又は船舶の便のない区間の水路旅行に、航空賃は航空機を利用すべき特別の事由がある場合における航空旅行について支給する。

2 鉄道賃及び船賃は旅行区間の路程に應ずる旅客運賃（はしげ賃及びびさん橋賃を含むものとし、運賃に等級を設ける線路又は船舶による旅行の場合には、運賃の等級を三階級に区分するものについては中級以下で裁判所書記官が相当と認める等級の、運賃の等級を二階級に区分するものについては裁判所書記官が相当と認める等級の運賃）、急行料金（特別急行列車を運行する線路のある区間の旅行で片道百キロメートル以上のものには特別急行列路のある区間の旅行で片道五十キロメートル以上のものは普通急行料金又は準急行料金）並びに裁判所書記官が支給を相当と認める特別車両料金及び特別船室料金並びに座席指定料金（座席指定料金を徴する普通急行列車を運行する線路のある区間の旅行で片道百キロメートル以上のもの又は座席指定料金を徴する船舶を運行する航路のある区間の旅行の場合の座席指定料金に限る。）によつて、路程賃は最高裁判所が定める額の範囲内において裁判所書記官が定める額によつて、航空賃は現に支払つた旅客運賃によつて、それぞれ算定する。

（日当の支給基準及び額）

第二十二條 日当は、出頭又は取調べ及びそれらのための旅行（以下「出頭等」という。）に必要な日数に依りて支給する。

2 日当の額は、最高裁判所が定める額の範囲内において、裁判所書記官が定める。

第二十三條 宿泊料は、出頭等に必要な夜数に応じて支給する。

2 宿泊料の額は、最高裁判所が宿泊地を区分して定める額の範囲内において、裁判所書記官が定める。

（本邦と外国との間の旅行に係る旅費等の額）

第二十四條 本邦と外国との間の旅行に係る旅費、日当及び宿泊料の額については、前三条に規定する基準を参酌して、裁判所書記官が相当と認めるところによる。

（旅費等の計算）

第二十五條 旅費（航空賃を除く。）並びに日当及び宿泊料の計算上の旅行日数は、最も経済的な通常の経路及び方法によつて旅行した場合の例により計算する。ただし、天災その他やむを得ない事情により最も経済的な通常の経路又は方法によつて旅行し難い場合には、その現によつた経路及び方法によつて計算する。

（鑑定料の額等）

第二十六條 第十八条第二項又は第二十条第一項若しくは第二項の規定により支給すべき鑑定料、通訳料、報酬及び費用の額は、裁判所が相当と認めるところによる。

（請求の期限）

第二十七條 この章に定める旅費、日当、宿泊料、鑑定料その他の給付は、判決によつて事件が完結する場合においてはその判決があるまでに、判決によらないで事件が完結する場合においてははその完結の日から二月を経過した日までに請求しないときは、支給しない。ただし、やむを得ない事由によりその期限内に請求することができなかつたときは、その事由が消滅した日から二週間以内請求した場合に限り、支給する。

（裁判官の権限）

第二十八條 受命裁判官、受託裁判官又はその他の裁判官が証人尋問その他の手続を行なう場合には、この章の規定による給付に関し裁判所が定めるべき事項は、当該裁判官が定める。ただし、当該裁判官が自ら定めることが相当でないとき、この限りでない。

（第三債務者の供託の費用の請求等）

第二十八條之二 民事執行法第百五十六条第二項若しくは第三項又は滞納処分と強制執行等との手続の調整に関する法律（昭和三十三年法律第九十四号）第三十六条の六第一項（これらを準用し、又はその例による場合を含む。）の規定により供託した第三債務者は、次の各号に掲げる費用を請求することができるものとし、その額は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

- 一 供託するために要する旅費、日当及び宿泊料 第二条第四号及び第五号の例により算定した額
二 供託所に出現しないで供託することができるときは、供託に要する書類及び供託金の提出の費用並びに供託書正本の交付を受けるために要する費用 提出又は交付一回につき第二条第十八号の例により算定した額
三 供託に要する書類及び供託の事情の届出の書類の作成の費用 供託又はその事情の届出一件につき最高裁判所が定める額
四 供託の事情の届出の書類の提出の費用 提出一回につき第二条第十八号の例により算定した額
五 供託に要する書類で官庁その他の公の団体の作成に係るものの交付を受けるために要する費用 交付一回につき第二条第七号の例により算定した額

2 前項の費用は、第二十七条の規定にかかわらず、供託の事情の届出をする時までに請求しないときは、支給しない。

3 第一項の費用は、供託金から支給する。

（債務者の財産に関する情報の提供に要した報酬の請求等）

第二十八條之三 民事執行法第二百七条第一項又は第二項の申立てを認容する決定により命ぜられた情報の提供をした者は、報酬及び必要な費用を請求することができるものとし、その額は、最高裁判所が定めるところによる。

第四章 雑則

（郵便切手等の管理）

第二十九條 第十三条の規定により予納させた郵便切手等の管理に関する事務は、最高裁判所が指定する裁判所書記官が取り扱う。

2 前項の裁判所書記官の責任については、物品管理法（昭和三十一年法律第百十三号）に規定する物品管理職員の責任の例による。

3 前二項に定めるもののほか、第一項の郵便切手等の管理について必要な事項は、最高裁判所（最高裁判所規則）

第三十條 この法律に定めるもののほか、民事訴訟等における証人等に対する裁判所の給付の実施その他この法律の施行に關して必要な事項は、最高裁判所が定める。

附則

この法律は、別に法律で定める日から施行する。

附則

（昭和四七年六月三日法律第五二号）抄

（施行期日等）

第一条 この法律は、公布の日から起算して三十日を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則

（昭和五〇年一月二七日法律第九四号）抄

（施行期日等）

第一条 この法律は、海上航行船舶の所有者の責任の制限に関する国際条約が日本国について効力を生ずる日から施行する。

附則

（昭和五〇年一月二七日法律九五号）抄

（施行期日）

第一条 この法律は、責任条約が日本国について効力を生ずる日から施行する。

附則

（昭和五四年三月三〇日法律第五号）

（施行期日）

1 この法律は、民事執行法（昭和五十四年法律第四号）の施行の日（昭和五十五年十月一日）から施行する。

（経過措置）

2 この法律の施行前に申し立てられた民事執行、企業担保権の実行及び破産の事件については、なお従前の例による。

3 前項の事件に關し執行官が受ける手数料及び支払又は償還を受ける費用の額については、同項の規定にかかわらず、最高裁判所規則の定めるところによる。

4 この法律の施行後に申し立てられた民事執行の事件に係るこの法律の施行前に生じた第四十八條の規定による改正前の民事訴訟費用等に関する法律第二条第十三号及び第十四号に掲げる費用については、なお従前の例による。



附則（平成一五年八月一日法律第三号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第三号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年四月二日法律第三号）抄

第一条 この法律は、平成十七年三月一日（以下「施行日」という。）から施行する。

附則（平成一六年五月二日法律第四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月二日法律第七号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月二日法律第七号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月二日法律第七号）抄

第一条 この法律は、破産法（平成十六年法律第七十五号。次条第八項並びに附則第三条第八項、第五条第八項、第十六項及び第二十一項、第八条第三項並びに第十三条において「新破産法」という。）の施行の日から施行する。

第十四条 附則第二条から前条までに規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附則（平成一六年六月九日法律第八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月八日法律第一二〇号）抄

第一条 この法律は、平成十七年四月一日から施行する。

附則（平成一六年六月八日法律第一二〇号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月八日法律第一二〇号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月八日法律第一二〇号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月八日法律第一二〇号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一六年六月八日法律第一二〇号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第二十九条 この法律の施行の日が労働審判法の施行の日前である場合には、同法の施行の日の前日までの間における民事訴訟費用等に関する

法律第三条第二項の規定の適用については、同項中「第三百九十七條第三項」とあるのは、「第三百九十八條第一項（同法第四百二條第二項において準用する場合を含む。）」とする。

第四十条 附則第三条から第十条まで、第二十九条及び前二条に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附則（平成一七年六月二九日法律第七号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一七年七月二六日法律第八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

附則（平成一七年七月二六日法律第八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

附則（平成一七年七月二六日法律第八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

附則（平成一七年七月二六日法律第八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一七年七月二六日法律第八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して三年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（令和元年五月二七日法律第二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。



規定、第六十七条中企業担保法第十七条第二項の改正規定（「第十八条」の下に、「第十八条の二」を加える部分に限る。）及び同法第五十五条の改正規定、第八十八条中民事訴訟費用等に関する法律附則を同法附則第一条とし、同条に見出しを付し、同法附則に十二条を加える改正規定、第九十四条中船舶の所有者等の責任の制限に関する法律第五十九条の次に一条を加える改正規定、第一百零一条中民事保全法第四十六条の改正規定（「第十八条」の下に、「第十八条の二」を加える部分に限る。）、「第三十条中金融機関等の更生手続の特例等に関する法律第六十六条の改正規定及び同法第二百三十二条の改正規定、第四百四十五条中民事再生法第一百五十五条の次に一条を加える改正規定及び同法第一百五十三条第三項の改正規定（「民事執行法（昭和五十四年法律第四号）第八十五条」を「民事執行法第八十五条から第八十六条まで」に改める部分に限る。）、「第六十一条第一項の規定、第二百二条中会社更生法第一百零三条第三項の改正規定（「民事執行法（昭和五十四年法律第四号）第八十五条」を「民事執行法第八十五条から第八十六条まで」に改める部分に限る。）及び同法第六十五条の次に一条を加える改正規定、第二百十六條第一項の規定、第二百十九條中人事訴訟法第九條に一項を加える改正規定及び同法第三十三條に二項を加える改正規定、第二百四十九條中破産法第二百一十一條の次に一条を加える改正規定、同法第二百二十二條第二項の改正規定、同法第三百三十六條の次に一条を加える改正規定及び同法第九十一條第三項の改正規定（「第八十五条」の下に「から第八十六条まで」を加える部分に限る。）、「第二百六十五條第一項の規定、第三百四條中非訟事件手続法第三十三條第四項の改正規定、同法第四十三條の改正規定及び同法第四十七條第一項の改正規定、第三百二十六條中家事事件手続法第四十條の改正規定、同法第四十九條の改正規定、同法第五十四條第一項の改正規定、同法第五十九條の改正規定、同法第六十條第二項の改正規定（「及び第一項」を「から第三項まで」に改める部分に限る。）、「同法第八十四條第一項の改正規定（「第三項まで」を「第四項まで」に改める部分及び「高等裁判所に」との下に、「第五十九條第三項中「家庭裁判所及び」とあるのは、「高等裁判所及び」とを加える部分に限る。）、「同法第二百六十條第一項第六號の改正規定及び同法第二百

六十一条第五項の改正規定、第三百四十一条中国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第七十条の改正規定、同法第七十五条第一項の改正規定、同法第八十条に一項を加える改正規定及び同法第三百三條第六項の改正規定並びに第三百五十六條中消費者の財産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律第五十三條の改正規定（「、第八十七条の二」を削る部分に限る。）

**附則（令和六年五月一日法律第二二二号）抄**  
**第一条** この法律は、令和七年四月一日から施行する。  
**附則（令和六年五月二四日法律第三三三号）抄**  
**第一条** この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、附則第十六條から第十八條まで及び第十九條第一項の規定は、公布の日から施行する。  
**附則（令和六年六月一日法律第五二二号）抄**  
**第一条** この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。  
 一 附則第四十八條の規定 公布の日  
**附則（令和六年六月一九日法律第五八二号）抄**  
**第一条** この法律は、公布の日から起算して一年六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。  
 一 附則第五條、第六條及び第八條の規定 公布の日

別表第一（第三條、第四條関係）	上欄	一 訴え（反訴を除く。）の提起
	下欄	訴訟の目的の価額が百萬元を超え、かつ、次に定めるところにより算出した額を得た額

その額二十万円までとし、千円に超えない部分の額は、その額が百萬元を超え、かつ、次に定めるところにより算出した額を得た額



五 請求の変更	四 請求について判断をしなかった判決に対する控訴の提起又は上告の提起若しくは上告受理の申立て	三 上告の提起又は上告受理の申立て(四の項に掲げるものを除く。)	二 控訴の提起(四の項に掲げるものを除く。)	
ついで(請求につきの変更後の請求額)	二の項又は三の項より算出した額の二分の一	一の項により算出した額の二倍	一の項により算出した額の五倍	万円まで(六)訴目的の価額の五部超えを千円未満に算出する
六				
反訴の提起				
ついで(請求額)	二の項より算出した額の二分の一	一の項により算出した額の二倍	一の項により算出した額の五倍	万円まで(六)訴目的の価額の五部超えを千円未満に算出する
七				
民事訴訟法第四十七条第一項又は第五十二条第一項の規定による参加の申出				
ついで(請求額)	二の項より算出した額の二分の一	一の項により算出した額の二倍	一の項により算出した額の五倍	万円まで(六)訴目的の価額の五部超えを千円未満に算出する
八				
再審の訴えの提起(簡易裁判所及び地方裁判所に提起するものを除く。)	二の八	二の八	二の八	再審の訴えの提起(簡易裁判所及び地方裁判所に提起するものを除く。)
額	四千元	四千元	四千元	額



円まで	十億	百	千	万	十	百	千	万	十	百	千	万	十	百	千	万	十	百	千	万	十	百	千	万	十	百	千	万	十	百		
(一) 民事調停法による調停の申立て又は労働審判法による労働審判手続の申立ての変更																																
(二) 家事事件手続法別表第一に掲げる事項についての審判の申立て又は同法の規定による参加の申出(申立人として参加する場合に限る。)																																
(三) 家事事件手続法別表第二に掲げる事項についての審判、同法第二百四十四条に規定する事件についての調停若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第三十二条第一項に規定する子の返還申立事件の申立て又はこれらの法律の規定による参加の申出(申立人として参加する場合に限る。)																																
(四) 仲裁法第十二条第二項、第十六条第三項、第十七条第二項から第五項まで、第十九条第四項、第二十条、第二十三条第五項又は第三十五条第一項の規定による申立て、民事執行法第二百五十五条第一項、第二百六条第二項若しくは第二項又は第二百七条第一項若しくは第二項の規定による申立て、非訟事件手続法の規定により裁判を求めるとして、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律(平成十三年法律第三十一号)第十条第一項から第四項まで又																																
(五) 消費者の財産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律第十三条の申立てその他の裁判所の裁判を求めるとして、基本となる手続が開始されるもの(この表の他の項に掲げる申立てを除く。)																																
(六) 非訟事件手続法の規定による参加(一三の項に掲げる参加を除く。)の申出(申立人として参加する場合に限る。)																																
(七) 民事訴訟法の規定による特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を訴訟代理人に選任することの許可を求めるとして、忌避の申立て、訴訟引受けの申立て、秘密記載部分の閲覧等の請求をすることができる者が当事者に限る決定を求めるとして、その決定の取消しの申立て、秘密決定を求めるとして、秘密事項記載部分の閲覧等の請求をすることができる者を秘密決定に係る秘密対象者に限る決定を求めるとして、秘密決定等の取消しの申立て、秘密決定等により閲覧等が制限される部分につき閲覧等を行うことの許可を求める申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、訴えの提起前における証拠収集の処分を申立て、訴えの提起前における証拠保全の申立て、受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に対する異議の申立て又は同法の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、																																

若しくは執行処分取消しを命ずる裁判を求め申立て  
 (ロ) 非訟事件手続法又は国際的な子の奪取の民事上の側面に關する条約の実施に關する法律の規定による忌避の申立て、特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を手続代理人に選任することの許可を求め申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、これらの法律の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求め申立て又は受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に対する異議の申立て  
 (ハ) 家事事件手続法の規定による忌避の申立て、特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を手続代理人に選任することの許可を求め申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、同法の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求め申立て、受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に対する異議の申立て、財産の管理に關する処分の取消しの申立て、不在者の財産の管理に關する処分の取消しの申立て、遺産の管理に關する処分の取消しの申立て又は義務の履行を命ずる審判を求め申立て

条第二項の規定による特別代理人の選任の申立て、同法第四十七條第四項若しくは第四十九條第五項の規定による裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、執行裁判所に対する配当要求、同法第五十五條第一項の規定による売却のための保全処分若しくは同法第五項の規定によるその取消し若しくは変更の申立て、同法第五十六條第一項の規定による地代等の代払の許可を求め申立て、同法第六十二條第三項若しくは第六十四條第六項の規定による裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、同法第六十八條の二第一項の規定による買受けの申出をした差押債権者のための保全処分の申立て、同法第七十七條第一項の規定による最高価買受申出人若しくは買受人のための保全処分の申立て、同法第七十八條第六項の規定による裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、同法第八十三條第一項の規定による不動産の引渡命令の申立て、同法第一百五條第一項の規定による船舶国籍證書等の引渡命令の申立て、同法第一百七條第一項の規定による強制競売の手續の取消しの申立て、同法第一百八條第一項の規定による船舶の航行の許可を求め申立て、同法第二百二十七條第一項の規定による差押物の引渡命令の申立て、少額訴訟債権執行の手續に對する裁判所書記官の執行処分に對する執行異議の申立て、少額訴訟債権執行の手續における裁判所書記官に對する配当要求、同法第六十七條の十五第三項の規定による申立て、同法第一百七十二條第二項の規定による申立て、同法第一百七十五條第三項若しくは第六項の規定による申立て、同法第八十七條第

一項の規定による担保不動産競売の開始決定前の保全処分若しくは同法第四項の規定によるその取消しの申立て又は同法第九十條第二項の動産競売の開始の許可の申立て  
 ハ 民事保全法の規定による保全異議の申立て、保全取消しの申立て、同法第二十七條第一項の規定による保全執行の停止若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求め申立て、同法第四十二條第一項の規定による保全命令を取り消す決定の効力の停止を命ずる裁判を求め申立て又は保全執行裁判所の執行処分に對する執行異議の申立て  
 ニ 参加（破産法、民事再生法（平成十一年法律第二百二十五号）、会社更生法（平成十四年法律第五十四号）、金融機関等の更生手續の特例等に關する法律（平成八年法律第九十五号）、船舶の所有者等の責任の制限に關する法律（昭和五十年法律第九十四号）又は船舶油濁等損害賠償保障法（昭和五十年法律第九十五号）の規定による参加及び七五の項、一三の項、一五の項、一五の二の項又は一六の項に掲げる参加を除く。）の申出又は申立て  
 ホ 破産法第八十六條第一項の規定による担保権消滅の許可の申立て、同法第九十二條第三項の規定による商事留置権消滅の許可の申立て、同法第二百四十八條第一項の規定による免責許可の申立て若しくは同法第二百五十六條第一項の規定による復権の申立て、民事再生法第四十八條第一項の規定による担保権消滅の許可の申立て、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に關する法律第十六條第三項若しくは第十七條第一項若しくは第三項の規定による

申立て、借地借家法第四十四條第一項ただし書の規定による弁護士でない者を手続代理人に選任することの許可を求め申立て、労働審判法第四條第一項ただし書の規定による弁護士でない者を代理人に選任することの許可を求め申立て、特定債務等の調整の促進のための特定調停に關する法律第七條第一項若しくは第二項の規定による民事執行の手續の停止若しくは続行を命ずる裁判を求め申立て、人事訴訟法（平成十五年法律第九十九号）第三十九條第一項の規定による申立て、特許法（昭和三十四年法律第二百一十一号）第五條の四第一項若しくは第五條の五第一項の規定による申立て、著作権法（昭和四十五年法律第四十八号）第一百十四條の六第一項若しくは第一百十四條の七第一項の規定による申立て、不正競争防止法（平成五年法律第四十七号）第十條第一項若しくは第十一條第一項の規定による申立て、私的独占の禁止及び公正取引の確保に關する法律（昭和二十二年法律第五十四号）第八十一條第一項若しくは第八十二條第一項の規定による申立て、スマートフォンにおいて利用される特定ソフトウェアに係る競争の促進に關する法律（令和六年法律第五十八号）第三十六條第一項若しくは第三十七條第一項の規定による申立て、種苗法（平成十年法律第八十三号）第四十條第一項若しくは第四十一條第一項の規定による申立て、家畜遺伝資源に係る不正競争の防止に關する法律（令和二年法律第二十二号）第十一條第一項若しくは第十二條第一項の規定による申立て又は仲裁法

<p>九一</p> <p>民事訴訟法第三百四十九條第一項、非訟事件手続法第八十三條第一項、家事事件手続法第三百三條第一項若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第九十九條第一項の規定による再審の申立て又は同法第一百七十七條第一項</p>	<p>八一</p> <p>抗告の提起又は民事訴訟法第三百三十七條第二項、非訟事件手続法第七十七條第二項、家事事件手続法第九十七條第二項若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第九十九條第二項の規定による抗告の許可の申立て</p>	<p>第四十九條第七項の規定による申立て へ 執行官の執行処分又はその遅怠に対する執行異議の申立て ト 最高裁判所の規則の定めによる申立てのうちイ又はロに掲げる申立てに類似するものとして最高裁判所が定めるもの</p>
<p>(4) (1) から (3) までの以外のもの</p> <p>千五百円</p>	<p>(1) 一〇の項、一五の二の項又は一六の項に掲げる申立てについて、裁判(抗告裁判所の裁判を含む)に対するもの</p> <p>(2) 一三の項に掲げる申立て又は申出た額を算出して得た額の倍の額</p> <p>(3) 民事保全の規定による保全抗告</p> <p>一〇の項に掲げる申立手の料の額の倍の額</p>	<p>それぞれの申立ての料の額の倍の額</p>

<p>この表の各項の上欄に掲げる申立てには、当該申立てについての規定を準用し、又はその例によるものとする規定による申立てを含むものとする。</p> <p>別表第二(第三条、第四条関係)</p>	<p>上欄 訴え(反訴を除く)の提起</p> <p>下欄 イ及びロに掲げる額の合算額 イ 訴訟の目的の価額に依り、次に定めるところにより算出して得た額 (一) 訴訟の目的の価額が百万円までの部分 その価額十万円まで 千円 (二) 訴訟の目的の価額が百万円を超え五百万円までの部分 その価額二十万円まで 千円 (三) 訴訟の目的の価額が五百万円を超え千万円までの部分 その価額五十万円まで 千円 (四) 訴訟の目的の価額が千万円を超え十億円までの部分 その価額百万円まで 千円 (五) 訴訟の目的の価額が十億円を超え五十億円までの部分 その価額五百万円まで 千円 (六) 訴訟の目的の価額が五十億円を超える部分 その価額千円まで 千円</p>	<p>の規定による終局決定の変更の申立て</p>
<p>五 請求の変更</p>	<p>三 上告の提起又は上告受理の申立て(四の項に掲げるものを除く)</p> <p>四 請求について判断をなかつた判決に対する控訴の提起又は上告受理の申立て</p> <p>二 控訴の提起(四の項に掲げるものを除く)</p>	<p>立てをする場合にあっては、千四百円)。 ただし、被告の数が二以上の場合にあっては、被告の数から一を減じた数に二千円を乗じて得た額を加算した額</p> <p>イ及びロに掲げる額の合算額 イ 一の項イにより算出して得た額の倍の額 ロ 千九百円(電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあっては、八百円)</p> <p>イ及びロに掲げる額の合算額 イ 一の項イにより算出して得た額の二倍の額 ロ 二千七百円(電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあっては、千四百円)</p>

<p>九 簡易裁判所以外の裁判所に対する再審の訴えの提起</p>	<p>八 簡易裁判所に対する再審の訴えの提起</p> <p>七 民事訴訟法第四十七條第一項若しくは第五十二條第一項又は民事再生法第三百三十八條第一項若しくは第二項の規定による参加の申出</p>	<p>六 反訴の提起</p>
<p>五千二百円(電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあっては、四千円)</p>	<p>三千二百円(電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあっては、二千円)</p>	<p>一の項イ(請求について判断した判決に係る控訴審における反訴の提起)に於ては、(二の項イ)により算出して得た額。</p> <p>ただし、本訴とその目的を同じくする反訴については、この額から本訴に係る訴訟の目的の価額について一の項イ(請求について判断した判決に係る控訴審における反訴の提起)に於ける反訴の提起に於ける(二の項イ)により算出して得た額を控除した額</p>

<p>○一</p> <p>和解の申立て</p> <p>二千七百円（電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあつては、二千四百円）</p> <p>イ及びロに掲げる額の合算額</p> <p>イ 請求の目的の価額に応じ、一の項イにより算出して得た額の二分の一の額</p> <p>ロ 二千七百円（電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあつては、二千五百円）</p>	<p>一一</p> <p>支払督促の申立て</p> <p>行政事件訴訟法の規定による執行停止の申立て又は仮の義務付け若しくは仮の差止め申立て</p>	<p>二一</p> <p>イ 民事訴訟法の規定による特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を訴訟代理人に選任することの許可を求め申立て、忌避の申立て、訴訟引受けの申立て、秘密記載部分の閲覧等の請求をすることができる者が当事者に限る決定を求め申立て、その決定の取消しの申立て、秘密記載を求め申立て、秘密事項記載部分の閲覧等の請求をすることができる者が当事者に限る決定を求め申立て</p> <p>五百円</p>	<p>三一</p> <p>行政事件訴訟法の規定による執行停止の申立て又は仮の義務付け若しくは仮の差止め申立て</p>
---	--	--	--

に限り決定を求め申立て、秘密決定等の取消しの申立て、秘密決定等により閲覧等が制限される部分につき閲覧等をするこの許可を求め申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、訴えの提起前における証拠収集の処分の申立て、訴えの提起前における証拠保全の申立て、受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に對する異議の申立て、手形訴訟若しくは小切手訴訟の終局判決に對する異議の申立て、少額訴訟の終局判決に對する異議の申立て又は同法の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求め申立て

ロ 参加（七の項に掲げる参加を除く。）の申出又は申立て

ハ 行政事件訴訟法の規定による執行停止決定の取消しの申立て若しくは仮の

義務付け若しくは仮の差止めの決定の取消しの申立て、労働組合法（昭和二十四年法律第七十四号）第二十七條の二十の規定による申立て、特許法第五條の二の三第一項、第五條の四第一項若しくは第一百五條の五第一項の規定による申立て、著作権法第六十四條の六第一項若しくは第七十四條の七第一項の規定による申立て、不正競争防止法第十條第一項若しくは第十一條の第一項の規定による申立て、私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律第八十一條第一項若しくは第八十二條第一項の規定による申立て、スマートフォンにおいて利用される特定ソフトウェアに係る競争の促進に関する法律第三十六條第一項若しくは第三十七條第一項の規定による申立て、種苗法第四十條第一項若しくは第四十一條第一項の規定による

<p>申立て又は家畜遺伝資源に係る不正競争の防止に関する法律第十一條第一項若しくは第十二條第一項の規定による申立て</p> <p>ニ 最高裁判所の規則の定めによる申立てのうちイに掲げる申立てに類似するものとして最高裁判所が定めるもの</p> <p>行政事件訴訟法の規定による執行停止の申立て又は仮の義務付け若しくは仮の差止め申立てについての裁判（抗告裁判所の裁判を含む。）に對する抗告の提起又は民事訴訟法第三十三條第二項の許可による抗告の申立て</p> <p>五千円（電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあつては、三千九百円）</p>	<p>四一</p> <p>行政事件訴訟法の規定による執行停止の申立て又は仮の義務付け若しくは仮の差止め申立てについての裁判（抗告裁判所の裁判を含む。）に對する抗告の提起又は民事訴訟法第三十三條第二項の許可による抗告の申立て</p> <p>三千円（電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあつては、千九百円）</p>	<p>五一</p> <p>一四の項に規定する裁判以外の裁判に對する抗告の提起又は民事訴訟法第三十七條第二項の規定による抗告の許可の申立て</p> <p>二千七百円（電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあつては、千六百円）</p>	<p>六一</p> <p>民事訴訟法第三十四條第一項の規定による再審の申立て</p> <p>二千七百円（電子情報処理組織を使用する方法による申立てをする場合にあつては、千六百円）</p>
--	--	---	---

この表の各項の上欄に掲げる申立てには、当該申立てについての規定を準用し、又はその例によるものとする規定による申立てを含むものとする。

別表第三(第七条関係)

		項	
		上欄	下欄
一	事件の記録の閲覧、謄写、複製又は複写(事件の係属中に当事者等が請求するものを除く。)	一件につき百五十円	
二	事件の記録の正本、謄本若しくは抄本の交付又は当該記録中電磁的記録部分に記録されている事項を証明した事項を証明した書面の交付若しくは当該事項を証明した電磁的記録の提供	用紙一枚につき百五十円(事件の記録中電磁的記録部分に記録されている事項を証明した電磁的記録の提供をする場合にあつては、一件につき二百円)	
三	事件に関する事項を証明した書面の交付又は当該事項を証明した電磁的記録の提供	一件につき百五十円(事件の記録の写しについて原本(事件の記録が電磁的記録で作成されている場合にあつては、当該電磁的記録に記録された情報の内容を書面に出力したときその書面。以下同じ。)の記載と相違ない旨の証明に係るものについては、原本十枚まで(ごとに百五十円)	
四	執行文の付与	一通につき三百円	